（様式３）

外国人児童生徒等教育アドバイザー派遣結果報告書

都道府県名	熊本県	市町村名	熊本市	大学名	
派遣日	令和　５年　９月　２０日（水曜日）　１４：００～１６：３０ ※１３：２０～１３：５５　事前打ち合わせ及び準備 ※１４：００～１６：３０　研修・指導助言				
実施方法	※いずれかに〇をつけてください。　派遣　／　遠隔				
派遣場所	熊本市立黒髪小学校				
アドバイザー氏名	市川　昭彦　先生 （元　大泉市立南小学校　教諭）				
相談者	熊本市教育委員会学校教育部　指導課				
相談内容	〇日本語指導の教材・教具、指導プログラム、指導計画の作成について 〇ねらいと評価について 〇先進校の実践について				
派遣者からの指導助言内容	１　外国人児童生徒を取り巻く現状と近未来 〇講師の勤務地であった群馬県の大泉町は企業やその関連工場の労働力として外国につながる子供が多い。その中で、在籍学級担任として、また研修主任として長年日本語指導に携わってきた。日本の労働力減少の中、２０１９年入管法改正、今後外国人労働者のさらなる規制緩和により、社会の変化、学校の変化が進む。少子化が叫ばれている日本経済の危機の中、外国につながる児童生徒は２０４０年問題を鑑みて貴重な存在である。講師の勤めていた学校で、ある先生の職員向け退任挨拶で、自立した大人になってほしいという思いが印象深かった。子供たちは日本を支える貴重な存在である。 〇日本語指導を必要とする児童生徒などへの主な取り組みについて 「卒業できない」「居場所がない」という高校の課題に鑑み、２０２３年度から高校でも「特別の教育課程」が導入され、正式な単位として卒業までに履修すべき７４単位の中に日本語指導を認めている。義務制ではないので、多様な取り組みが可能となった。選択教科における日本語指導としてミュージカル制作に取り組もうとしている高校もある。将来の日本と世界をつなぐ懸け橋となる国際的人材として育成していきたい。 〇「教育振興基本計画」に従い、外国につながる児童生徒が自らの「長所・強み」を活用し可能性を発揮できるよう、母語や母文化の重要性に配慮しつつ、円滑な適応を図る。これは、熊本市の日本語指導の基本方針に重なるものである。 〇「外国人児童生徒受入の手引き（改訂版）」のキーワードは、「特別の教育課程・共生」ならびに「指導・連携」である。 ２　DLA と JSL をとおした「ねらい」と「評価」 〇大泉町で作成した日本語指導プログラム例の紹介 指導例は、サバイバルから初期指導時期用である。学習につながる日本語指導には６～７年はかかるため、早い段階から日本語指導と教科指導を平行して取り組んでいくことが大事である。 〇会話力を土台として読む・書く・聴く・話す日本語力を測る DLA と在籍学級での学				

（様式３）

	びへとつなげる学習カリキュラムJSLの２つの研究がある。在籍学級への学習参加度合いを明らかにできるように、ＪＳＬ評価参照枠をもとに個別の指導計画、また手引きの日本語プログラムを重ねて作成。技能別日本語プログラム等ＪＳＬカリキュラムを活用した授業づくりにより、単に日常的な会話の力をつけるのではなく、学ぶ力すなわち、学習に参加するための力を身に付けさせることが必要である。 〇更に、教科における本時のねらいと１つか２つに絞った日本語のねらいとの両面から授業展開を工夫する。日本語のねらいへの手がかりとして、AU（Activity Unit）カードがある。ＡＵとは学習活動に必要な日本語表現のバリエーション、すなわちクラスルームジャパニーズに近いものとしての言葉である。教科のねらいと日本語のねらいを合わせて指導。取り出し指導の場合、担任との連携を図るためには、学習の様子をメモとして共有していくことが効果的である。担任の負担軽減を意識してメモへの返信なしとすることが続けるコツ。継続することでやがて、担任とのプラスになるコミュニケーションが増えて着る。 〇通知表や連絡表で、保護者に伝えるときは日本語特有のあいまいな表現を用いると、できていると思ってしまうこともあるので、「～が、できるようになった。」「～が、まだできていない。」等、具体的に伝えた方がよい。 ３　先進校の実践 〇JSLカリキュラム、JSL５支援について 　日本語力を伸ばすＪＳＬトピック型として、学習を支える言葉をもとに、まず子供たちからの質問を通して考えていく授業例の紹介。質問力をつけると観察力、推察力が身に付き、日本語による学ぶ力が身に付いていく。初期指導と教科の学びの架け橋となるのが、トピック型授業。現在、特に求められているのは、日本語と教科の統合型、各教科の学習に日本語で参加できる力を育むことをねらいとした教科志向型ＪＳＬカリキュラムである。その中で講師の作成した算数の領域別系統表は途中編入学の子供にも活用できる。教科書が違っても、データを入れ替えて使えるので、熊本市で作り変えて、さらによりよいものに育ててほしい。 　漢字学習においては、非漢字圏から来た子供たちからすると記号に見えることもある。そこで、漢字を記号から意味をもつ文字へと意識変革させるために、部首の指導が効果がある。部首の持つ意味を理解させた上で、部首を比べたり、漢字を部首で分解させたりする。さらに、その学習をホワイトボード上に残しておいたり、イラストとつなげたり、部首かるたをしたり、といった記憶支援が有効的。ＩＣＴ活用として、学校と学校を結び６年生同士でクイズを出し合うオンライン授業の紹介。年号カードの時代別並べでは、両方の学校で同じ資料を繰り返し使うことで安心して学習できた。画面越しではあったが、お互いに名前で呼び合うようにした。「名前で呼ばれてうれしかった。」という感想を多く得られた。 　１０歳から１５歳の子供たちは、成長に伴い自分探しが始まっていく。いつも友達から教わっている立場ばかりでいると自己肯定感や自立心が下がる傾向にある。そのため、情意支援により心の安定やできるという自信を持たせることが大事。安心感のもとでは記憶も促進される。自律・情意支援例として、「がんばったね」カード等、頑張りを「見える化」したり、できなかったことを捕えられるようなテストを子供と共同で作成し、それを繰り返したりすることで、成果を認められるようにしていくことが効果的。キャリア教育としては、小学生のうちから将来の夢を具体的に意識させる機会を設けていく。「夢を意識した理由」「夢の実現のために、どんな高校に行ったら、その先はどうしていきたいか。」等、具体的に書かせる。その過程で、子供の夢を応援

（様式３）

	していく。 〇まとめとして、外国につながるＪＳＬの子供たちは、昼間は日本語、家庭に帰ったら母語を使い、１日のうちで文化間移動をしている。「すごいことをしている」と尊敬の気持ちをもって接する。この子供たちは、「できない」のではなく日本語が「わからない」だけ。本当はすごい語学力が育っている。居場所づくりに加えて、子供たちを尊敬している、すごいと思う気持ちをもって接することで、子供たちの自尊心を高めていってほしい。輝けJSLの子供たち！！
相談後の方針の変化、今後の取組方針等	１　講師の市川先生の実践に裏付けられた分かりやすいご講話で、日本語指導者の意欲が高まり、大変有意義な研修になった。事後のアンケートでも１００％「今後の指導に生かせる研修であった」の回答があった。休憩時間にも質問や悩み相談が絶えず、充実した研修となった。次年度も是非アドバイザー派遣による研修を希望したい。 ２　新規採用の指導者の研修体制の課題構築が課題であった。今回、日本語指導担当教員だけでなく、日本語指導協力員や支援員にも参加してもらった。理論及び実践研修の機会としても、とても有効であった。次年度からも、市教委主催の研修会として継続し、初任者も経験者もそれぞれにさらなる指導力向上に努めたい。 ３　熊本市は外国人児童生徒が増加している。加えて、台湾半導体企業TSMC関連の児童生徒の増加が想定されている。今回の研修を活かして、受け入れ体制の整備や教育委員会とセンター校及び各学校との連携体制をより充実していきたい。

１枚にまとめる必要はありませんので詳細に記載願います。

なお、本報告書の内容は、文部科学省ホームページで公開いたします。